

大和南部型埴輪の分類と様式

— 藤原宮下層資料の報告から —

木村 理

I はじめに

奈良県橿原市に所在する藤原宮は、わずか16年の存続期間ながら条坊制や宮殿における瓦葺建物の採用など、日本の古代国家成立にあたり重要な舞台となった宮である。一方、その成立背景を探るうえで、藤原宮をはじめとした大和盆地南部における古墳時代段階の集落動態や古墳築造動向にかんする検討も不可欠といえる。

こうした問題意識も踏まえ、本稿では藤原宮下層から出土した5世紀末～6世紀前葉に位置づけられる埴輪の資料報告を出発点として、当地域の古墳築造動向や器物生産流通動態の復元を試みたい。

II 資料の報告

藤原宮下層における埴輪の出土状況や時期比定については既に先論があるものの（西口1980、前岡2004）、今回の整理の結果、その中に「大和南部型」と呼称される、固有の特徴を有する一群が含まれることがわかった。以下、新出資料となる3地点の埴輪を報告する。

1 201-3次調査の出土埴輪（図1）

藤原宮南面の外周帯における調査で、整理用木箱1箱分の埴輪が出土した。遺構に伴う形ではないが、焼成や胎土、色調には一定のまとまりがあることから同一古墳に供給された資料群と判断できる。

資料のうち大和南部型と考えられるのは、6や7などごく一部である。いずれも焼成は不良で、肥厚しない口縁端部や、最上段の波形線刻、最下段の右傾するタテハケを特徴とする。底部調整にかんして、7の内外面は不調整である。

他方、出土埴輪で多くを占めるのはIV群・V群の折衷的様相を示す資料である。これらは、底部には板押圧による底部調整を、底部から2段目以上にはB種ヨコハケを施す。突堤の成形技法は不明瞭だが、低平で波打つように貼り付けられるものが多い。また、底部調整には板状工具の圧痕のみならず、その先端に布目とみられる痕跡も確認できる（4）。

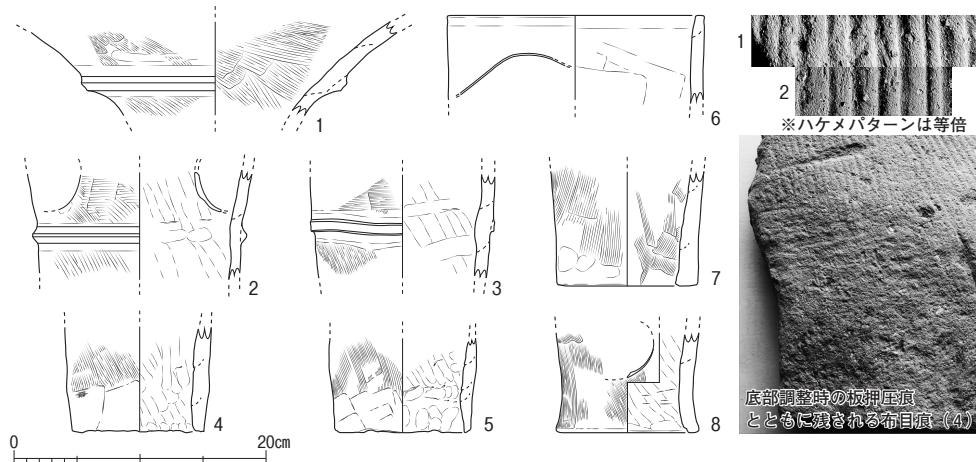


図1 201-3次調査の出土埴輪

同様の資料は、畿内地域のV群埴輪でしばしば認められることが指摘されており（廣瀬2021）、当地点の埴輪も一般的な畿内系の資料として位置づけられる。また、朝顔形埴輪や形象埴輪も出土しているが、ハケメバターンの一致や最下段のタテハケの向きから、これらは畿内系の一群に属するものとみなせる。

2 132次調査の出土埴輪（図2）

朝堂院東第三堂を中心とした調査区で、整理用木箱1箱分の埴輪が出土している。わずかに中期中葉に位置づけられるような、突帯間隔10cmを測り、突帯の突出が高い資料を含むが、それを除けば時期的なまとまりは強く、一古墳に供されたものと推測できる。

出土埴輪は、12など一部にV群とみられるものが存在するが、9割以上の個体が大和南部型の特徴を備えており、201-3次調査例とは比率が逆転している。その大和南部型は、総じて突帯の突出が高く、底部の端面および外面に回転力のあるケズリを施す。外面に黒斑を有する（4・7・10）ほか、口縁部端部は肥厚しないもの（1・2）と肥厚するもの（3～6）の両者がほぼ同数ずつ存在する。ヘラ記号は、波形線刻の可能性のあるもの（1）に加えて、それとは異なるもの（4・5）が含まれる。各部の間隔は不明確だが、6や9に基づけば底部高は17～18cm、口縁部高は9cm程度に復元できる。

そのほか、図化していないものの、突帯の剝離面に設定線と思われる沈線が残される個体も存在する。通有の埴輪にみられるような幅のあるものではなく、幅が狭く先端が鋭利な工具で付されたものと推定される。

形象埴輪では家形埴輪と思われる破片（13）が出土している。焼成は不良で、大和南部型に属する可能性も残すが、小片であるため判断は保留しておく。

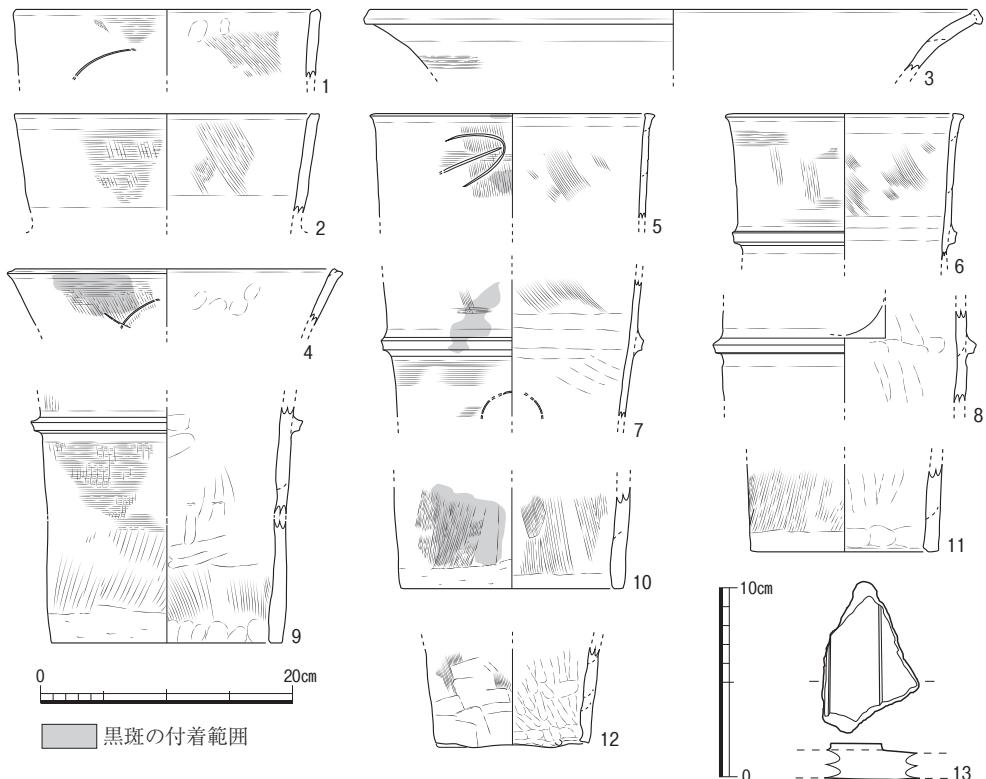


図2 132次調査の出土埴輪

3 174次調査の出土埴輪（図3～5）

朝堂院北東部における調査で、整理用木箱7箱分の埴輪が出土している。132次の資料と同様、朝堂院内での出土だが、出土位置が離れているほか、後述の通り埴輪の特徴もやや異なる。したがって、別の古墳に伴うものであったと判断される。

出土埴輪は、V期に位置づけられるものでは大和南部型のみで占められる。焼成は不良で、黒斑が付着する個体も見受けられる。胎土はやや粗く、色調は橙～浅黄色を呈する。

円筒埴輪から概要を述べると、まず口縁部は端部が肥厚するものを主体とし、口縁部高は1や7などに基づけば8～9cm程度であったと推測される。最上段にはヘラ記号が付され、単純な波形線刻とみられるもの（1・2・7）や、それが組み合わさったもの（3）、二重になるもの（4）などが存在する。中でも、3はイノヲク12号墳や滋賀県・御明田古墳の資料に類例がある。

体部のうち、外面には回転力のあるヨコハケを施す。内面はハケやナデにより調整され、底部付近や口縁部付近にはハケが、体部中位にはナデが施される傾向にある。

底部は、内外面ともハケにより調整され、外面のタテハケは右傾する。底部調整には、無調整（10・11）、回転ケズリ（12～14）、板押圧（15～23）といったバリエーションが認め

られるが、板押圧を施すものが50%程度を占める。回転ケズリは、個体を正立させた際に砂礫が左へ動くように施されており、倒立状態での施行を想定した場合、回転台の回転は時計回りであったと推測される。また、無調整のものでは、11のように端部付近に強い指オサエ痕を残すものが含まれる。同様の例は、新沢166号墳や高所寺池SD9850の大和南部型埴輪で確認できるほか（廣瀬2021）、額田部狐塚古墳の尾張系埴輪でも散見する（坂編2015）。無調整のものや回転ケズリを施すものは、最下段をヨコハケ調整するものが多数であるのに対し、板押圧によるものはタテハケで仕上げられる。

なお、底部端面ははっきりとした調整痕跡をとどめないものの、明確な面を有し、V群埴輪のように先端が尖る個体は見受けられない。底部調整時にケズリを施した、あるいは正立時における作業（乾燥）台への圧着が強かった、などの可能性が考えられる。底部高

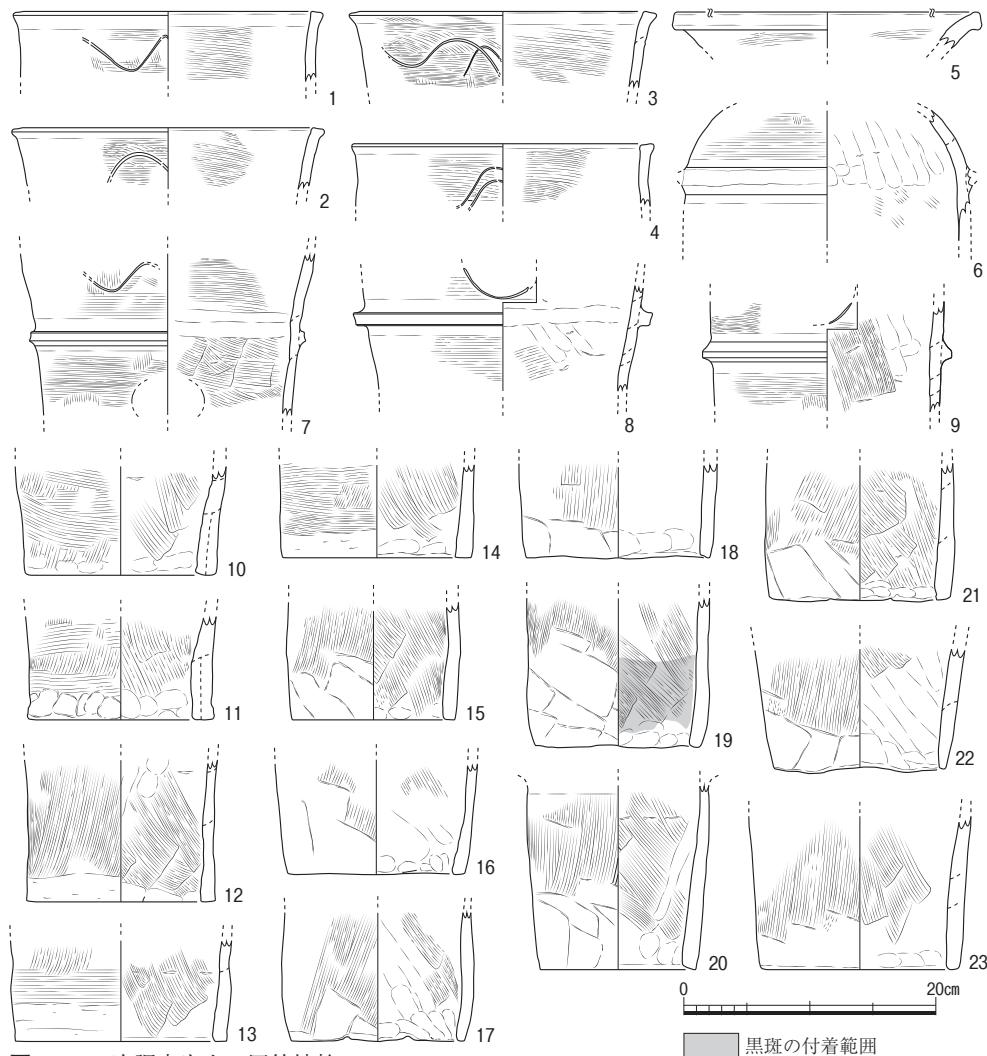


図3 174次調査出土の円筒埴輪

は、20を例にとれば16~17cm程度に復元しうる。

形象埴輪では蓋形埴輪、盾形埴輪、家形埴輪、人物埴輪などがある。いずれも焼成や胎土、色調は円筒埴輪と同様であり、大和南部型に属する形象埴輪とみられる。

蓋形埴輪のうち立飾部（24~27）は、先端を丸く成形したうえで内側と外側に1か所ずつの割り込みをもつ、きわめて形骸化した形状を呈し、皿部の剥離面の位置から考えて、低平な形態であったと推測される。基本的に無文だが、ヘラ記号とみられる「×」印を付す個体（24）や、当初は文様を付していた個体（26）も存在する。笠部（28）は、基部からの「出」が小さく、外面に文様が配される。

盾形埴輪（29）は、盾面に形骸化した鋸歯文を施し、背部に水平方向の支持粘土を付加する。盾持形埴輪の可能性もある。

家形埴輪には、屋根部（31）と壁体下部（32・33）の破片が存在する。屋根部は、頂部が平坦につくられ、その外周に受け皿状の突帯が付される。隅棟にも突帯が貼付される。壁体は、裾廻突帯を有するもの（32）と、それが付されないもの（33）に分かれる。横断

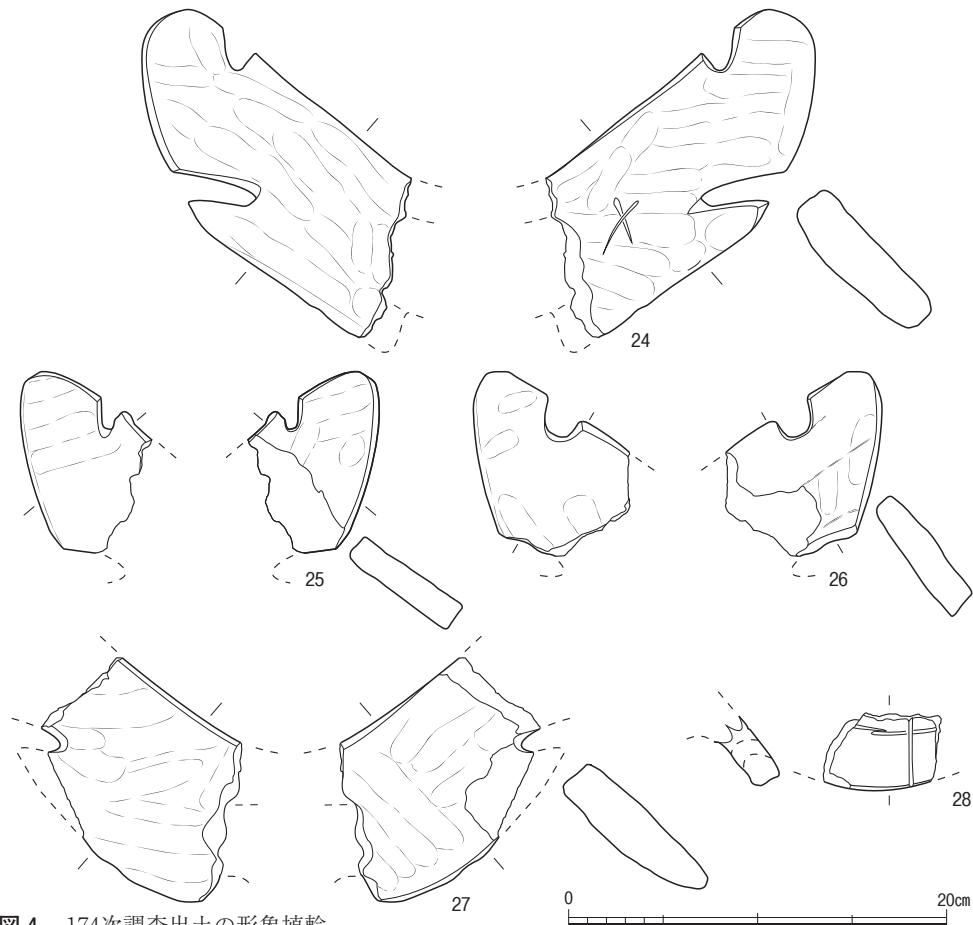


図4 174次調査出土の形象埴輪

面形状がわずかに弧を描く。人物埴輪（30）では腕のみが出土している。中空で、粘土板成形。肘をやや曲げ、腕を前方へ伸ばす所作をとる。掌などに剥離痕は認められない。

そのほか、34・35は形象埴輪の基部。34は、内傾気味に立ち上がる器形を呈し、底部の

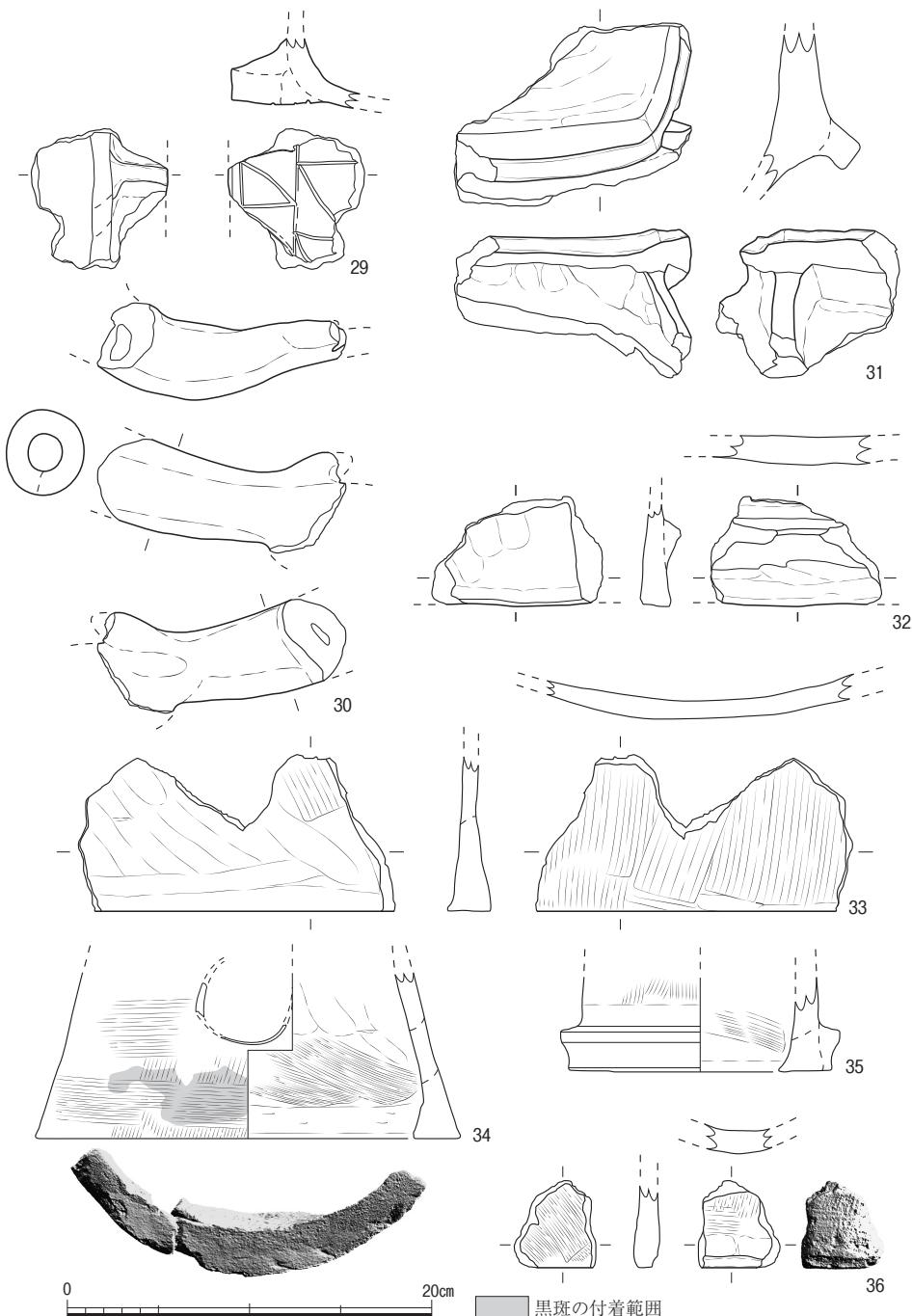


図5 174次調査出土の形象埴輪ほか

内面および端面に回転ケズリを施す。35は、端部に突帯を貼り付ける。突帯端面に指頭圧痕は残されず、丁寧にナデ整形される。両者とも内傾接合により粘土紐を積み上げる。

36は不明底部片。外面のタテハケは右傾し、端部付近には幅1cmほどのくぼみを残す。くぼみの直上には指頭圧痕を残すが、ハケ調整との先後関係は不明である。淡輪技法を想起させるような形態を呈するものの、細片のため評価は保留せざるをえない。焼成や胎土、色調はほかの円筒埴輪、形象埴輪と同様である。

4 各資料の編年的位置づけ

ここまで、藤原宮下層における3地点の埴輪を新たに報告した。続いては、そこで主体となっていた大和南部型の円筒埴輪を対象に、各資料の編年的位置づけを検討する。

大和南部型の円筒埴輪編年につきては、底部調整や突帯形状、口縁部形状、ヘラ記号などを指標とした3段階区分案が内藤元太により近年提示され（内藤2020）、それを再編しつつ、V群埴輪との併行関係も視野に入れた2期区分案も示されている（東影2022）。以下、そこで示された諸属性に着目したい。

底部調整 時期がくだるにつれ、回転ケズリから板押圧へ推移することが指摘されている。そこで、上記の資料についても検討してみると、201-3次資料では無調整のもの、132次資料では無調整のものに加えて回転ケズリを施すもの、174次資料では無調整のものや回転ケズリを施すものに加えて板押圧を施すものが存在し、うち132次資料では回転ケズリのものが、174次資料では板押圧のものが主体をなす。各資料とも無調整のものが一定数を占めるほか、174次では回転ケズリのものと板押圧のものが共伴する点で、その違いは漸移的だが、既往の理解に基づけば132次資料→174次資料という時間差が想定される。

突帯形状 時期がくだるにつれ、突出が低くなる一方で基部幅が広くなるといった扁平化傾向にあるという。個体数に恵まれている132次と174次の資料を対象とすると、174次の資料は突出幅3mm、上辺幅0.7~0.9mm程度を測る扁平化の進んだ資料を一定数含む。ただ、双方とも突出幅は平均6.5mm、上辺幅は平均6mmと、同様の値を示す。突帯形状からみた際、174次の資料が後出的な要素を備えるが、その差は小さい。

口縁部端部 時期がくだるにつれ、端部を肥厚させるものが増加する。上記の各資料についても検討を試みると、201-3次資料では通有の端部形状のもので占められる一方、132次資料では通有の形状を呈するものと肥厚するものがほぼ半数ずつ、174次資料では9割以上が肥厚するものである。既往の理解にしたがえば、201-3次資料→132次資料→174次資料といった順序を想定するのが穩当だろう。

なお、口縁部に付される波形線刻が一周するか否かが指標になる場合もあるが、残存状況が悪い上記の資料では明らかにしえない。大和南部型に一般的な波形線刻を付すものが

各資料でみられる一方、それとは異なるものが資料数の限られている現状でも一定数存在するなど、特定のヘラ記号で占められない点も特筆できる。

資料の遺存状況により、個別属性を検討せざるをえなかったが、編年指標とされる各属性がいずれも201-3次資料→132次資料→174次資料といった順序を示す結果となった。

また、大和南部型は古い段階ではV群埴輪と共に伴し、形象埴輪や朝顔形埴輪はV群に属する、対して新しい段階では形象埴輪、朝顔形埴輪も含めて大和南部型で占められる傾向にあるという（内藤・東影2021）。こうした観点からも検討を試みると、201-3次資料は現時点では円筒埴輪・朝顔形埴輪・形象埴輪ともV群に属するものが主体をなし、わずかに大和南部型が含まれる、132次資料はわずかなV群円筒を除いて大和南部型が大多数を占める、174次資料は円筒埴輪・朝顔形埴輪・形象埴輪のすべてが大和南部型に属するなど、製作技法とともに様式面でも変化を伴っていることが確認できる。このような様式的な変遷が、大和南部型を採用する古墳で画一的に生じるものであるかはなお検討の余地を残すが、少なくとも藤原宮下層の各資料については先学の分析成果に適合的といえよう。

以上を総合すると、上記の報告資料に対しては201-3次資料→132次資料→174次資料といった変遷を想定でき、既存の編年案に当てはめた際、前二者は大和南部型1期、後者は同2期に比定しうる。ただし、それぞれの備える特徴は互いに重複しており、ごく近接した時期に製作されたものとみなせる。

なお、藤原宮下層では既報告の資料として高所寺池SD9850、同9870出土の大和南部型埴輪が挙げられるが（花谷編2006）、これらは同1期に位置づけられる。

このように、近接した時期に埴輪を有する古墳が少なくとも5基存在したことが明らかになった点は、古墳時代における当エリアの土地利用状況を知るうえで重要である。未発見の古墳なども考慮すれば、藤原宮の位置するエリヤー一帯は5世紀末～6世紀前葉における群集墳の一大造営地であったことがうかがえよう。

III 大和南部型円筒埴輪の分類と生産

ここまで、藤原宮下層で出土した資料を新たに報告し、それぞれの時期的位置づけを試みた。続いては、大和盆地南部全体に視野を広げ、大和南部型埴輪の生産実態の復元に迫りたい。それにあたり、まずは円筒埴輪の規格の検討に基づいた分類をおこなう。

1 規格からみた大和南部型円筒埴輪の分類

突帯剥離面に沈線が残されること、異なる個体同士で各部長がある程度統一化されていることなどから、大和南部型の円筒埴輪には間隔設定にかかる一定の規範が存在したとみ

られるが、規格の検討は製作技法に比べると十分には深められていない。その中で、当系統に2種の規格を見出した河内一浩の指摘は現在も有効といえる（河内2004）。すなわち、紀伊の資料を扱った河内は3条4段の資料について、2条3段の個体に1段分を増やした形態を呈するもの（「大谷グループ」）と、全高の1/2の箇所に最下段突帯が付されるもの（「花山グループ」）の2者を見出したのである。

底部に強いケズリを施すため本来の底部高は不明であること、そもそも2条3段の個体であっても器高の1/2の箇所に最下段突帯が割り付けられていないものも存在するなど、河内の論拠とする「2分割法」については改めて検討する必要がある。しかしながら、各地で存在する当系統の3条4段の埴輪において、①底部高÷2・3段目突帯間隔で、それに口縁部最上段が付加されるような器形を呈する一群と、②全高の約1/2の箇所に最下段突帯が割り付けられ（底部高÷2・3目突帯間隔+口縁部高）、結果的に突帯間隔や口縁部高が狭くなる、あるいは底部高が高くなる一群が存在することは認めてよいだろう。

そうした観点から各地の資料を概観すると、①・②の双方が存在する紀伊や近江とは異なり、大和では大多数の資料が①で占められていることがわかる。また、①の中でもプロポーションなどからいくつかの細別類型が存在することにも気づく。以下では、大和盆地で主体をなす①に包摂される下位区分について、当地域の資料を対象とした類型設定をおこなう（図6）¹。

I類 全高の40~50%程度を占める高い底部高と、突帯間隔÷口縁部高を特徴とする一群。底部高16~19cm、突帯間隔6~8cm、口縁部高7~9cmを目安とし、3条4段の資料の場合、底部から3段目の突帯間隔が同2段目よりもやや広くなる傾向にある。新沢166号墳例や同175号墳例、石光山30号墳例など。

II類 I類と同じく突帯間隔÷口縁部高となるが、底部高が全高の30%強を占めるにとどまる、やや低い一群。底部高13~15cm、突帯間隔6~8cm、口縁部高7~9cmを目安とする。I類と同様、3条4段の資料では底部3段目の突帯間隔が同2段目よりもやや広くなる傾向にあることも特筆される。新沢175号墳例のほか、四条8号墳で当類に該当する可能性のある個体が出土している。

III類 器高に対して高い底部高を呈する点ではI類と同様だが、突帯間隔>口縁部高となる一群。底部高16~19cm、突帯間隔6~8cm、口縁部高4~6cmを目安とする。全形の判明する資料に乏しいが、観覚寺鳥ヶ峰1号墳例や清水谷1号墳例などが挙げられる。

口縁部高が突帯間隔より短いことに対しては、口縁端部を肥厚させる際に折り返したためという解釈もありうるが、突帯間隔÷口縁部高となるI類にも端部を肥厚させる個体は存在する。したがって、口縁部製作時の偶発的なものとみなすよりも、I類とは割り付け原理を違えていたとみるのが適切である。また、こうした口縁部高の低いものは、紀伊や

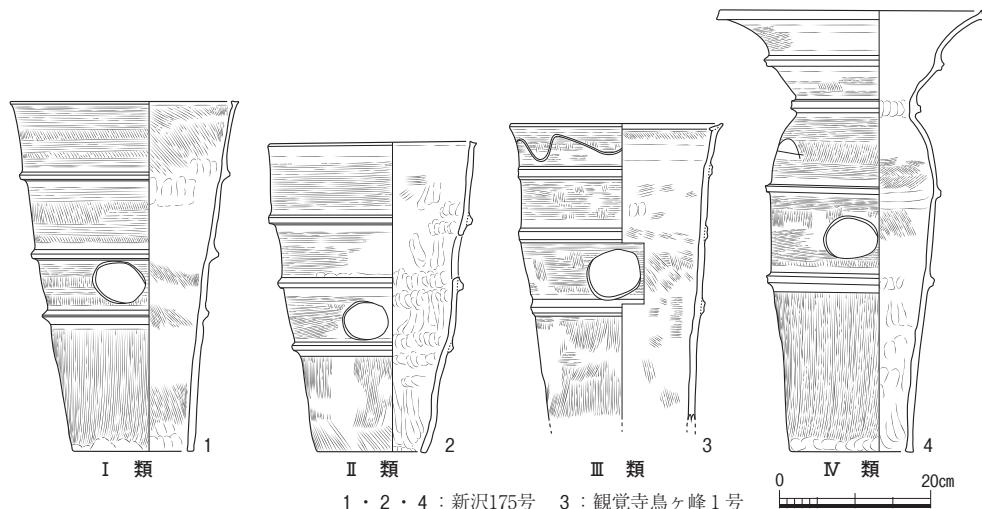


図6 大和盆地における大和盆地型円筒埴輪の諸類型

近江における、器高の約1/2の箇所に最下段突帯が割り付けられる資料（底部高÷2・3目突帯間隔+口縁部高）で特徴的にみられる。

IV類 底部高・突帯間隔ともほかの資料に比べひと回り大きく、底部高20~23cm、突帯間隔11~12cmを測る一群。口縁部高は大和盆地の資料では不明だが、周辺地域の事例を参考にすれば8cm前後と突帯間隔よりも短い。新沢175号墳における朝顔形埴輪などが該当する可能性があるほか、周辺地域の事例だが和歌山県・大日山35号墳や滋賀県・林ノ腰古墳の資料において一定数認められる。朝顔形埴輪に多い。

ただ、当類は各部長の値をもって分類しており、プロポーションを重視するほかの類型とは分類原理をやや異にしている。その位置づけについては今後検討する必要がある。

2 各類型の製作時期と分布

以上、大和南部型円筒埴輪を規格に基づいて分類したが、続いては類型ごとの製作時期と分布についてみていきたい。

製作時期 I類は、新沢166号墳や深谷1号墳、池田8号墳、三倉堂遺跡といった1期に位置づけられる古墳すでに多数存在していることに加え、続く2期においても新沢175号墳や石光山30号墳、同41号墳で主体をなす。通時的かつ最も普遍的に認められる類型といえ、前節で報告した藤原宮の132次資料や174次資料も当類に属する可能性が高い。

II類は、1期に位置づけられる四条8号墳の例を嚆矢とし、続く2期の新沢175号墳でも継続的に確認できるといったようにI類と消長を同じくする。ただし、各時期における出土量は少ない。

これに対して、Ⅲ類は1期の古墳ではその存在が不明瞭で、観覚寺鳥ヶ峰1号墳や清水谷1号墳、寺口忍海H19号墳の例に示されるように、2期に顕在化する²。資料数はⅠ類に比べれば少ないものの、2期においては周辺地域も含め一定数を占める。

Ⅳ類もⅢ類と同様、1期の古墳からは今のところ出土せず、主たる製作時期は2期にくる可能性が高い。しかし、大和盆地での出土例はきわめて少ない。

以上、類型ごとに出土時期の検討をおこなったが、改めて整理すると1期はⅠ・Ⅱ類が主体を占め、2期になるとⅢ・Ⅳ類が加わるといった大局が見えてくる。この見方は、新しい段階ほど多様性が増すというこれまでの見通し（内藤・東影2021）におおむね整合的といえる。ただし、大和南部型の出現期である1期の時点でⅠ類のみならず、Ⅱ類もすでに製作されている点、新しい時期にいたっても様々な規格が無作為に採用されるわけでなく、一定の共通性をもちながらそれぞれが展開していく点にも注目する必要がある。

また、Ⅲ・Ⅳ類といった口縁部高の低い類型が、突帯間隔＝口縁部高のⅠ・Ⅱ類に後出する点が明らかになったことは編年論に対しても有効であろう。すなわち、底部調整や突帯形状、口縁部形状の変化とともに、突帯間隔>口縁部高を呈する資料（Ⅲ・Ⅳ類）の増加という事象も、2期の指標に加えることができる。無論、2期においても主体をなすのはⅠ類であり、必要十分な指標となるわけではない。

分布 続いては、各類型の分布について検討していこう（図7）。

まずⅠ類は、最も普遍的に認められるものであり、その分布も時期を問わず大和南部型を採用する古墳の分布と重なる。加えて、2期においては和歌山県・大日山35号墳や滋賀県・林ノ腰古墳、御明田古墳でも出土するなど、周辺地域に展開する。存続期間の長さのみならず、分布の広域性においても当類は大和南部型の基本形であったと評価して問題ない。

Ⅱ類は、Ⅰ類と同様、通時的に存在する類型で、現状では四条古墳群や新沢千塚古墳群で確認できる。出土資料数が少ないと懸念されるが、現状の傾向に一定の有意性を認めるとすれば、当類は大和盆地南部の中でも中央部を中心としたものとみなせる。

対して、Ⅰ・Ⅱ類にやや遅れて顕在化するⅢ類は、上記の四条古墳群や新沢千塚古墳群ではむしろ潜在的で、盆地南部の中でも最南端に位置する現・高取町域や寺口忍海古墳群でまとまって出土する。無論、Ⅰ類とⅢ類は共伴する場合もあり、加えて製作技法やヘラ記号の共有関係にあるなど、排他性をもって生産・供給されていたわけではないことは明らかである。しかしながら、現状の分布状況に一定の傾向が見出せるのも事実である。実際、資料に恵まれている新沢175号墳では、当類に該当する資料が含まれない。資料の増加を俟たざるをえないが、Ⅲ類はⅠ・Ⅱ類とは主たる分布域をやや違え、現・高取町域や寺口忍海古墳群において濃密に分布する類型として捉えておきたい。

最後に、Ⅳ類は大和盆地ではほぼ認められない。新沢175号墳において当類に該当する

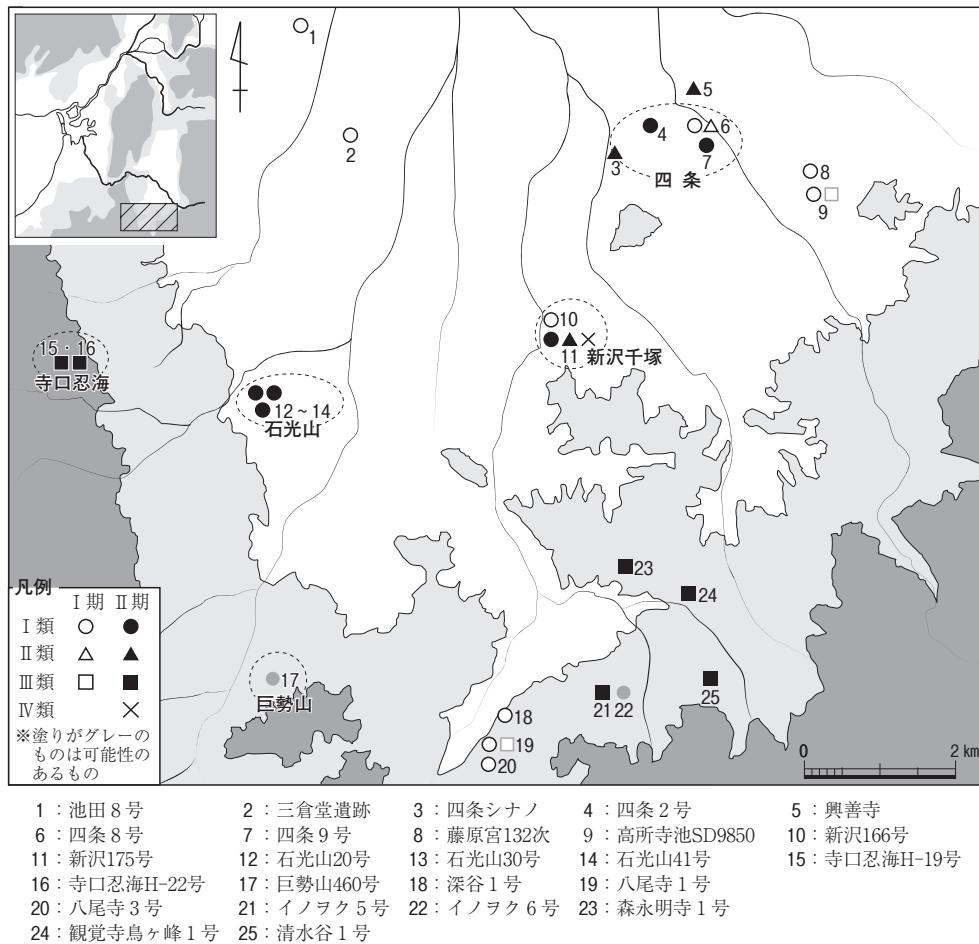


図7 類型ごとの大和南部型円筒埴輪の分布状況

可能性のある資料が存在するものの、朝顔形埴輪であるため口縁部高も含めた規格性については不明確である。むしろ、大和盆地南部で潜在的なのとは対照的に、紀伊や近江のとりわけ大型前方後円墳において当類が一定数存在することは注目される。

3 類型設定からみた大和南部型の円筒埴輪

以上、類型設定をおこなったうえで、時期別の消長と分布について検討した。そこから導かれる現状の理解を、大和南部型の円筒埴輪生産にかかる予察として提示しておきたい。

まず、本稿で提示した各類型にかんして、それぞれは定量生産されていること、時期や分布において一定の傾向を有することに鑑みれば、その相違は偶発性ではなく、特定の規範を共有する生産単位の違いを反映したものと捉えるのが素直といえる。事実、新沢175号墳の分析成果（内藤・東影2021）を参照した際、本稿における各類型は、基本的に工人

あるいはハケメ工具を共有する関係にある工人単位の相違と合致している。したがって、類型の差異は規模を問わなければ生産単位の相違を反映している蓋然性が高い。

この理解に立ったとき、Ⅱ～Ⅳ類の各類、特にⅢ類が一定の分布を見せながら展開することは重要であろう。内藤は、被葬者の性格の違いを越えて各群集墳に一律的に製品が供給されたことを強調するが（内藤2018・2020）、その細部をみればエリア・群集墳ごとに類型を違える場合も見受けられるからである。とりわけ、Ⅲ類が濃密に分布する現・高取町域の各古墳や寺口忍海古墳群は、ほかの古墳群とは異なり、鍛冶具副葬をはじめ渡来色豊かな副葬品や生活様式を見せる点で共通する。一つの生産母体による地域一円的な供給を目指しつつ、その下位に位置する生産単位レベルではエリア・群集墳ごとの特色が投影されていたことも十分に見込まれよう。

無論、これらが大和南部型として一つの型をなしている、さらには上記①の規格の範疇にあることも重要といえる。また、類型をまたいで製作技法のみならず、ヘラ記号が共通する場合も少なくない。例えば、新沢175号墳ではⅡ・Ⅲ類が共伴しており、両者は基本的に同工品あるいはハケメを共有する関係はないが、ヘラ記号は共通している。ヘラ記号の同一性をもって、当古墳の埴輪を一つの生産単位による製品とみるならば、そこに包摂されるⅡ・Ⅲ類のそれぞれは、ヘラ記号を共有するような、より規模の大きい生産単位中の下位区分に相当するものとみなしうる。こうした理解も踏まえると、上記した類型ごとの分布差は大和南部型を製作する工人集団の、編成下位区分の生産動向を反映したものと捉えておくのが穩当だろう。

ところで、新沢175号墳の同工品分析を実施した内藤元太は、規格の異なる製品をまたいで同一のヘラ記号が付される事象に対し、「埴輪の製作数が増加する中で、埴輪の規格を統一することを重視しなくなっていた」結果と評価する（内藤・東影2021：p.116-120）。しかしながら、こうしたヘラ記号を共有する生産単位内にいくつかのグループ（類型）が見出される構図は、まさしく菅原東埴輪窯のあり方（田中2013）と同様である。特徴的な形態や技法、分布傾向からV群埴輪とは対比的に捉えられる大和南部型だが、その生産体制自体は需要増加と広域供給を特徴とした、古墳時代後期における埴輪生産の特質を凝縮したものであったと予察される³。

IV 大和南部型形象埴輪の基礎的検討

ここまで、藤原宮下層から出土した大和南部型埴輪を報告し、そこから視点を広げて円筒埴輪の分類と生産体制にかかる見通しを述べた。一方、藤原宮下層資料に立ち戻ると、174次資料など一定数の形象埴輪に恵まれている点も向後の大和南部型埴輪の研究にとっ

ては重要である。円筒埴輪が系統や型の把握対象となってきた中で、形象埴輪に対しても大和南部「型」としての特徴を抽出しうる段階にあると考える。

以下では、円筒埴輪に比べ検討が進められていなかった形象埴輪を対象として基礎的な分析を試み、大和南部型埴輪を様式的に捉えるための一助としたい。

1 大和南部型形象埴輪の器種構成

大和南部型に属する形象埴輪は、円筒埴輪ほど明確な型をなさないことに加え、V群の形象埴輪も供給される場合があるため、その抽出が容易でない。一方で、藤原宮174次の埴輪も該当するように、とりわけ2期に位置づけられる資料群については大多数が大和南部型に属するとみなせる場合も少なくない。焼成や胎土、色調なども考慮しつつ、主に2期の資料を対象として大和南部型の形象埴輪を抽出した。

まず、製作される器種としては、家（藤原宮174次、石光山20号墳、寺口忍海H-19号墳例など）、蓋（藤原宮174次、新沢82号墳、光雲寺1号墳例など）、盾（藤原宮174次）、石見型・盾（藤原宮174次、イノヲク12号墳例）、人物（藤原宮174次、巨勢山707号墳、巨勢山460号墳例など）、馬（巨勢山707号墳例など）が挙げられる。後期の埴輪様式を構成するほぼすべての器種が大和南部型でも製作されていたといえよう。少なくとも2期の大和盆地では、大和南部型として完結的な生産が行える段階にあったとみられるのである。

続いて各古墳の器種組成をみていくと、いずれも小規模古墳であることもあってか、家形埴輪や蓋形埴輪など少量の器種を伴うに過ぎない。複数種が出土している古墳としては、藤原宮174次資料のほか、イノヲク12号墳（円・20m）や巨勢山707号墳（方円・27m）、巨勢山460号墳（円・15m）の例が挙げられるが、墳形や規模に明確な傾向は見出せない。むしろ、調査面積や古墳の削平度合いなどを考慮するならば、大和南部型を採用する古墳相互、あるいはV群埴輪を採用する同規模の古墳との間で、組成上著しい格差はなかったと想定するのがよいだろう。採用される器種やその多寡は、近畿地方全体の埴輪と古墳秩序をめぐる枠組みの中で十分に理解できるものである。

2 大和南部型形象埴輪の製作技法

こうした大局的な理解を踏まえたうえで、続いてはいくつかの器種を取り上げて形態や製作技法を検討し、大和南部型形象埴輪の特徴を浮き彫りにしたい。

蓋形埴輪　当系統の蓋形埴輪の特徴は、先端を丸く成形した飾板に鋭利な切り込みを入れて鰐表現とすること、文様を施さないことである。また、藤原宮174次の資料を参考にすれば、立飾部の大部分が皿部縁辺に取り付き、著しく基部高の低い形態を呈していたことが推測される。

対して、笠部では文様を有するもの（藤原宮174次例）と、無文のもの（光雲寺1号墳例）の両者が存在する。ともに基部からの「出」は小さく、総じて小型である。その基部にかんして、藤原宮174次の34を蓋形埴輪とみれば、上部にむかって内傾するものも存在したようである。

通有の蓋形埴輪が、飾板先端を方形に成形し、比較的緩やかな切り込みを入れて鰐を表現する、あるいは基部を比較的高く成形するのと対照的といえよう。

石見型（盾形）埴輪基部 東影悠が述べるように（東影2010）、当系統の基部では一部を除き倒立技法が採用されず、正立成形するものが主体をなす。そのほかにも、イノヲク12号墳の例が示すように、基部突帯が付されないことも特徴的である。基部下端は、藤原宮174次例のように幅広の突帯を付すものと、イノヲク12号墳例のように突帯を付さないものが認められる⁴。前者における基部突帯は、丁寧にナデ整形され、指頭圧痕などは残されない。通有の石見型埴輪が倒立技法を採用し、基部下端に突帯を貼り付ける場合、指頭圧痕を明瞭に残すものが多いのは様相を異にしている。

形象部は、全形の判明する資料に乏しいものの、無文で小穿孔を多用する傾向にある。

家形埴輪 高橋克壽の指摘にある通り（高橋2012）、当系統に属する切妻造の家形埴輪では、破風板に突起を付すものが特徴的に認められる。高橋が例示した寺口忍海H-19号墳、石光山20号墳の例に加えて、イノヲク6号墳でも同様の例が存在する⁵。また、V群埴輪でもみられる特徴ではあるが、屋根部に小穿孔を穿つ個体もしばしば見受けられる。

壁体では、裾廻突帯をもたず、やや内傾気味に立ち上がるものが石光山20号墳や新沢312号墳、藤原宮174次で出土している。ただし、通有の裾廻突帯をもつものも併存するなど、いくつかのバリエーションが存在したようである。

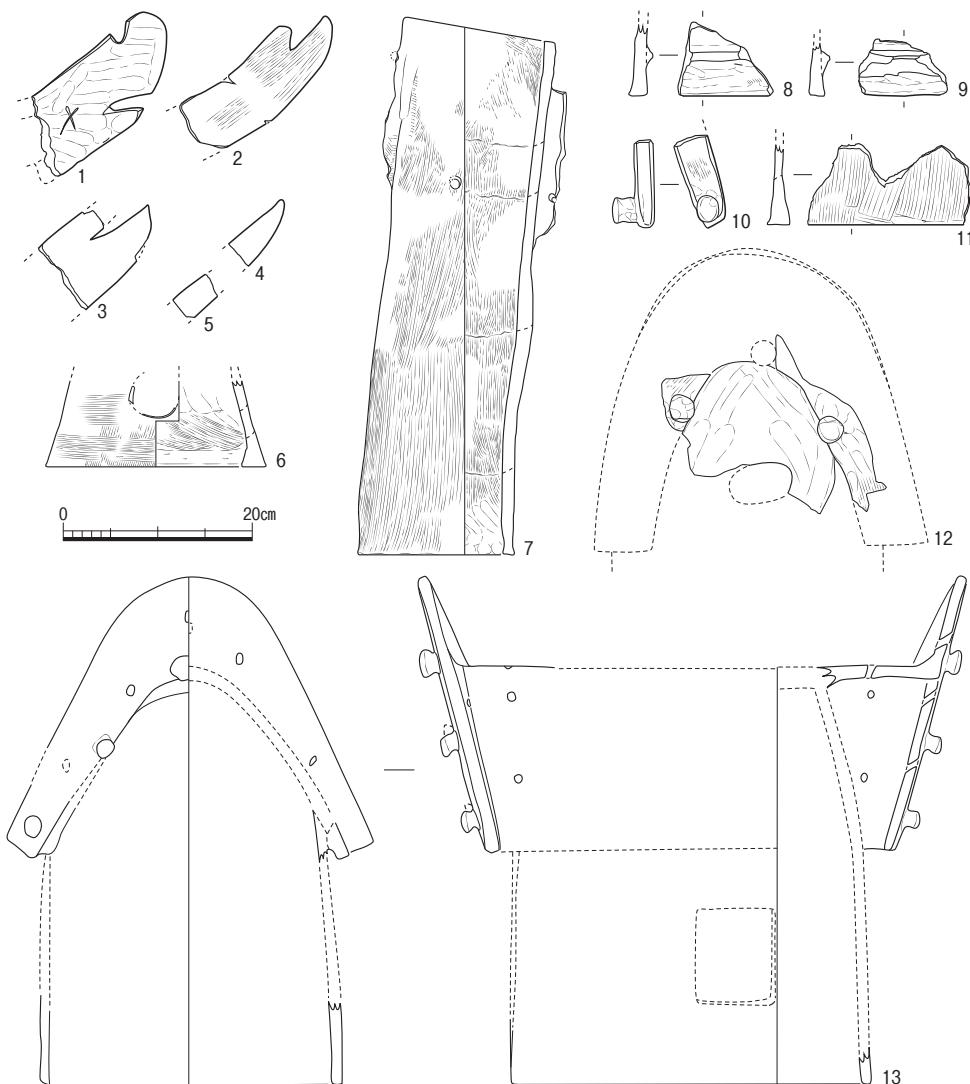
そのほか、人物埴輪は腕部を中空で製作するものが多数を占め、巨勢山707号墳では被り物や頭髪の表現をもたない特異な頭部が出土しているといったように、特徴的な資料も見受けられる。また、獸脚は脚端部に突帯を付すものが主体をなす。

以上、器種を絞りつつも、大和南部型の形象埴輪の特徴を抽出した。当系統に属する形象埴輪が形態・製作技法ともV群のそれと大きく異なることは明らかで、両者が部分的に接点をもちつつも、一定の距離を置いて製作されていたことはほぼ間違いない。大和南部型の円筒埴輪が、V群埴輪の要素を徐々に取り入れつつも、一貫して独自の製作技法を保持する点と同様、両者が協業する機会は限定的であったと推測される。「IV群系」として、IV群埴輪との関連が示唆されてきた大和南部型だが（鐘方2003）、少なくとも形象埴輪についてその製作基盤がIV群埴輪、あるいはそこから派生したV群埴輪に求められないことは明確であろう。

翻って、大和南部型の形象埴輪が備える上記の特徴は、しばしば「稚拙」と表現されて

きたものである。実際、各器種とも小型で、V群埴輪にみない表現や製作技法を有するなど、V群埴輪を基準にすれば「稚拙」ともいえる。

しかしながら、筆者はこのような「稚拙」さが大和南部型における形象埴輪の製作基盤の脆弱性を物語るものではないと考える。蓋形埴輪や石見型（盾形）埴輪、家形埴輪を対象に述べたように、各器種には当系統独自の一定のまとまりが見出せるからである。無論、中にはこれに該当しないものも少なからず含まれており、上記を大和南部型の形象埴輪として一括することはできない。しかしながら、製作の度に散発的にV群埴輪の模倣がなさ



1・6・9・11：藤原宮174次 2：新沢82号 3～5：新沢112号 7：イノヲク12号 8・10：イノヲク6号
12：寺口忍海H-19号 13：石光山20号

図8 大和南部型形象埴輪の諸例

れるというより、V群埴輪を模倣しつつも大和南部型の中で系列的な製作がなされていたことを想定するのが実態になじむ。

なお、円筒埴輪では異なる類型が主に出土する石光山古墳群と寺口忍海古墳群だが、形象埴輪では同様の特徴をもつ製品が供給されている。両者を総合した様式的な生産体制復元が向後、不可欠であろう。

V おわりに

本稿では藤原宮の下層から出土した大和南部型埴輪の報告に端を発し、円筒埴輪の分類とそれに基づいた時期別・地域別動向の検討、および形象埴輪の基礎的な検討を実施した。後期の埴輪生産全体を見据えた大局的な理解が提示される中で、微に入り細を穿つ分析に終始した感も否めないが、円筒埴輪であれば、面的な生産体制像に対して群集墳・小エリアを単位とした生産単位の存在を、形象埴輪であれば「稚拙」な生産体制像に対して系統内での一定の基盤に基づく系列的生産の存在を見通し的に述べた。

また、上記のあり方が大和南部型2期に顕在化することも重要である。5世紀末以降の大和盆地では、古墳群や小地域を越えた広域での生産体制が確立し、「埴輪生産拠点が盆地内の各所に計画的に配置されていく」ことが指摘されるが（廣瀬2021：p.48）、一つの集團による完結的な生産体制の整備がなされるのは、少なくとも大和盆地南部においては6世紀に入ってのことであった可能性もある。さらに、市尾墓山古墳や鳥屋ミサンザイ古墳といった大型前方後円墳では、大和南部型埴輪の供給圏に位置しながらも、通有のV群埴輪が主体的に供給される。このように、埴輪供給圏の形成には地域的なまとまりだけでなく、階層的なグルーピング、あるいは古墳被葬者の性格といった側面も依然として強く作用していたように思われる。実態解明に向けて、引き続き検討を進めていきたい。

本稿は、日本学術振興会科学研究費補助金（課題番号：20K22035）の成果を含む。

註

- 1 紙幅の都合により割愛したが、各資料の底部高・突帯間隔・口縁部高を計測し、それらのヒストグラムをとったうえで、統計上有意な値を各類の指標としている。
 - 2 2期に位置づけられる高所寺池SD9850の資料には口縁部高5.6cmを測り、Ⅱ類に該当する可能性のある資料も含まれるが、全形は不明である。
 - 3 菅原東埴輪窯では、複数の小グループで一つのヘラ記号が共有され、そのヘラ記号で東ねられる製品群が古墳への供給単位となっている（田中2013）。一方で、大和南部型の場合、例えば一定の分布傾向を見せるⅢ類など、小グループに相当する単位が一古墳への生産・供給を担っていた可能性のある例も存在する。供給古墳の規模に応じたものと判断される。
- また、大和南部型では各類型が異なるヘラ記号にまたがって存在するなど、類型とヘラ記号の

関係性を階層的に把握できない事例も多い。大局的にはヘラ記号を上位の編成区分としていたとみられるが、細部にいたってはそれが逆転しているかのように映る例が存在するのである。菅原東埴輪窯などとの対比も含めて、生産体制の内実をめぐる検討は今後の課題としたい。

4 藤原宮174次の基部は、馬形埴輪をはじめとした獸脚に復元できる可能性もある。類似した資料は、巨勢山707号墳でも出土している。

5 同様の表現を有する家形埴輪は今城塚古墳などでも存在する。

参考文献

- 河内一浩 2004「紀伊型円筒形埴輪再考」『地域と古文化』同刊行会 pp.130-139
- 鐘方正樹 2003「円筒埴輪の地域性と工人の動向」『埴輪—円筒埴輪製作技法の觀察・認識・分析—』第52回埋蔵文化財研究集会 pp.175-191
- 高橋克壽 2012「埴輪」『講座日本の考古学』8 古墳時代（下）青木書店 pp.237-269
- 田中智子 2013「古墳時代後期の埴輪生産・供給体制の実像をめぐって」『立命館大学考古学論集』VI 同刊行会 pp.333-352
- 内藤元太 2018「大和南部を主眼とする後期円筒埴輪の系統」『埴輪論叢』第8号 墓輪検討会 pp.159-171
- 内藤元太 2020「大和南部型埴輪の展開とその背景」『古代学研究』225 古代學研究會 pp.19-40
- 内藤元太・東影悠 2021「大和南部型埴輪の生産組織に関する復元的研究」『研究紀要』第25集 由良大和古代文化研究協会 pp.109-127
- 西口寿生 1980「飛鳥・藤原地域出土の埴輪」『飛鳥・藤原宮発掘調査報告』Ⅲ 奈良国立文化財研究所 pp.232-235
- 花谷浩編 2006『高所寺池発掘調査報告』奈良文化財研究所
- 坂靖編 2015『繼体大王とヤマト』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館
- 東影悠 2010「形象埴輪の製作技術—形象基部倒立技法の研究—」『待兼山考古学論集Ⅱ』大阪大学考古学研究室 pp.539-556
- 東影悠 2022「古墳時代後期の円筒埴輪」『埴輪の分類と編年』埴輪検討会 pp.51-71
- 廣瀬覚 2021『6世紀の埴輪生産からみた『部民制』の実証的研究』奈良文化財研究所
- 前岡孝彰 2004「埴輪からみた藤原宮域の古墳時代」『奈良文化財研究所紀要2004』奈良文化財研究所 pp.20-21

挿図出典

図1～5：筆者実測・作成（ハケメバターン、製作技法写真は筆者撮影）

図6：新沢175号墳（伊達宗泰編1981『新沢千塚古墳群』奈良県立橿原考古学研究所）、観覚寺鳥ヶ峰1号墳（内藤2018）を再トレース

図7：筆者作成

図8：新沢112号墳（伊達編1981）、イノヲク12号墳（木場幸弘編1992『イノヲク古墳群第4次発掘調査報告』高取町教育委員会）、イノヲク6号墳（木場幸弘編1991『イノヲク古墳群第3次発掘調査報告』高取町教育委員会、寺口忍海H-19号墳（吉村幾温・千賀久編1988『寺口忍海古墳群』新庄町教育委員会）、石光山20号墳（白石太一郎ほか1976『葛城・石光山古墳群』奈良県立橿原考古学研究所）を再トレース